

**S14c 「あかり」北黄極大規模サーベイによる Chandra 衛星 Hard X 線源の同定**  
大藪 進喜、Chris Pearson、松原 英雄、和田 武彦、高木 俊暢、中川 貴雄 (ISAS/JAXA)、花見 仁史 (岩手大学)、他「あかり」チーム

2006年2月に打ち上げられた赤外線天文衛星「あかり」は、2006年5月8日より北黄極大規模サーベイを進めていることは、前回の学会(2006b)で既報である。現在も観測は順調に進行しており、また同時にその取得したデータの解析・評価を進めている。

北黄極大規模サーベイのデータを本サーベイの目的の一つ “見落とされている活動銀河核の探査” という観点で評価をした。活動銀河核の検出性の評価のために、本サーベイのデータと Chandra 衛星での Hard X 線源との比較を行った。X 線源は、Chandra 衛星による惑星状星雲 NGC6543 の 46ksec の ACIS による観測から、その周りに 2-10KeV のバンドでの Hard X 線源として Serendipitous な発見が報告されている 21 天体を使用した (Harrison et al. 2003)。これらの X 線源は、 $3.78 - 45.9 \times 10^{-15} \text{erg cm}^{-2} \text{s}^{-1} (2-10\text{KeV})$  のフラックスを持っている。一方、Hard X 線源の領域と重なっている北黄極大規模サーベイ NEP-Deep の 6 バンドの近・中間赤外線 N2,N3,N4,S7,S9W,S11 バンドのデータ ( $2\mu\text{m}-12\mu\text{m}$ ) を解析して、比較した。

結果、21 の Hard X 線源のうち、18 個の同定に成功した。Eckart et al.(2005,2006) で、可視光による同定作業を行っているが、 $R < 23$  程度の観測では 21 天体中 11 個しか同定できていない。また同定できなかった 3 天体は、NGC6543 に近すぎるために、われわれデータから天体検出が困難であったことによる。さらに、サンプル中には、赤方偏移 4.3 という高赤方偏移の活動銀河核も含まれており、本サーベイのデータにおいても検出できている。本発表では、このような結果をふまえ、赤外線サーベイによる活動銀河核探査の可能性を示す。